

史跡大室古墳群

平成21年度 古墳見学会資料



大室241号墳 合掌形石室

2009年12月19日(土)

大室古墳群保存会
長野市教育委員会

①史跡整備事業と今年度の発掘調査について

史跡大室古墳群は平成9年に国史跡に指定され、平成10年度より史跡入口のエントランスゾーンの整備事業を実施しています。

本年度は、27号墳・29号墳・241号墳・242号墳・243号墳・244号墳の6基の古墳について保存のための修理工事を計画しましたが、241号墳の大きさや形が不明瞭であったことから、この点を明らかにすることを目的に発掘調査を実施しました。

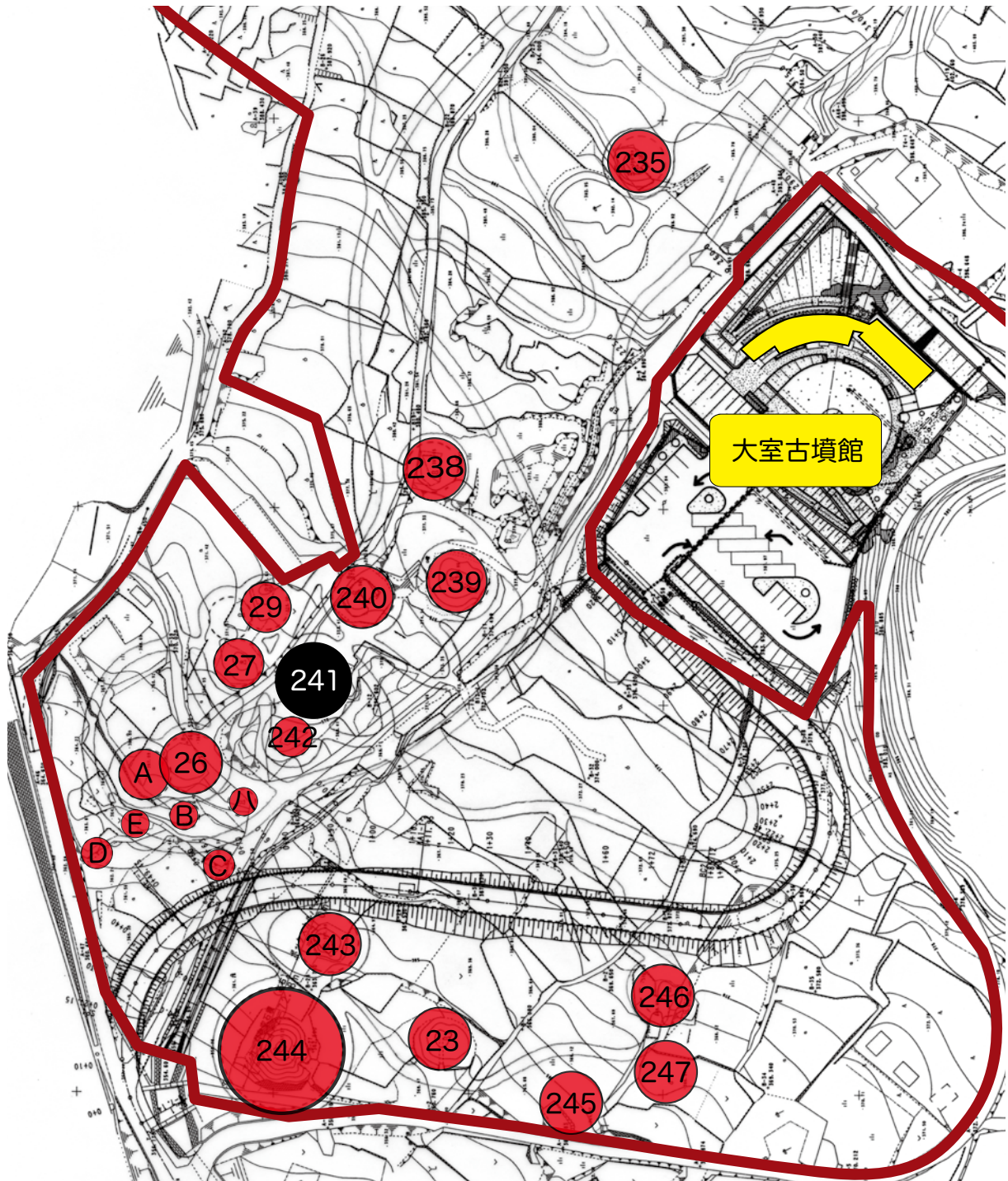


図1 241号墳位置図

②241号墳の発掘調査

241号墳は、平成11・12・17年度の3回にわたり、古墳の周囲に調査区を設定して発掘調査を実施しています。この結果、

- ・墳丘は石を積み上げた「積石塚古墳」であること
- ・墳丘上に埴輪を樹立した古墳であること
- ・出土した埴輪が五世紀後半代の特徴をもち、エントランスゾーンで最も古い古墳である可能性が高いこと

という点がわかっていました。しかし墳丘の改変が著しいことから、重要な古墳であるにもかかわらず、古墳の大きさや形という基本情報が不明となっていました。こうした点より、史跡大室古墳群整備委員会や文化庁、長野県教育委員会の指導を受け、保存修理工事に先立って発掘調査を実施することとなりました。

調査区は、墳丘上の墳頂区、北西側のG区、南東側のD区を設定しました。また、G区の調査で241号墳に関わる遺構が検出されなかったことから、F区トレンチを墳丘側に延長しています(Fトレ拡張区)。

墳頂区は、もともと墓石や地蔵が並んでいて、近世以降の墓地として利用されていました。この墓地に関わる掘込みを除去すると、「合掌形石室」とみられる埋葬施設が確認されました。

合掌形石室の特徴である天井石はすでに失われてい

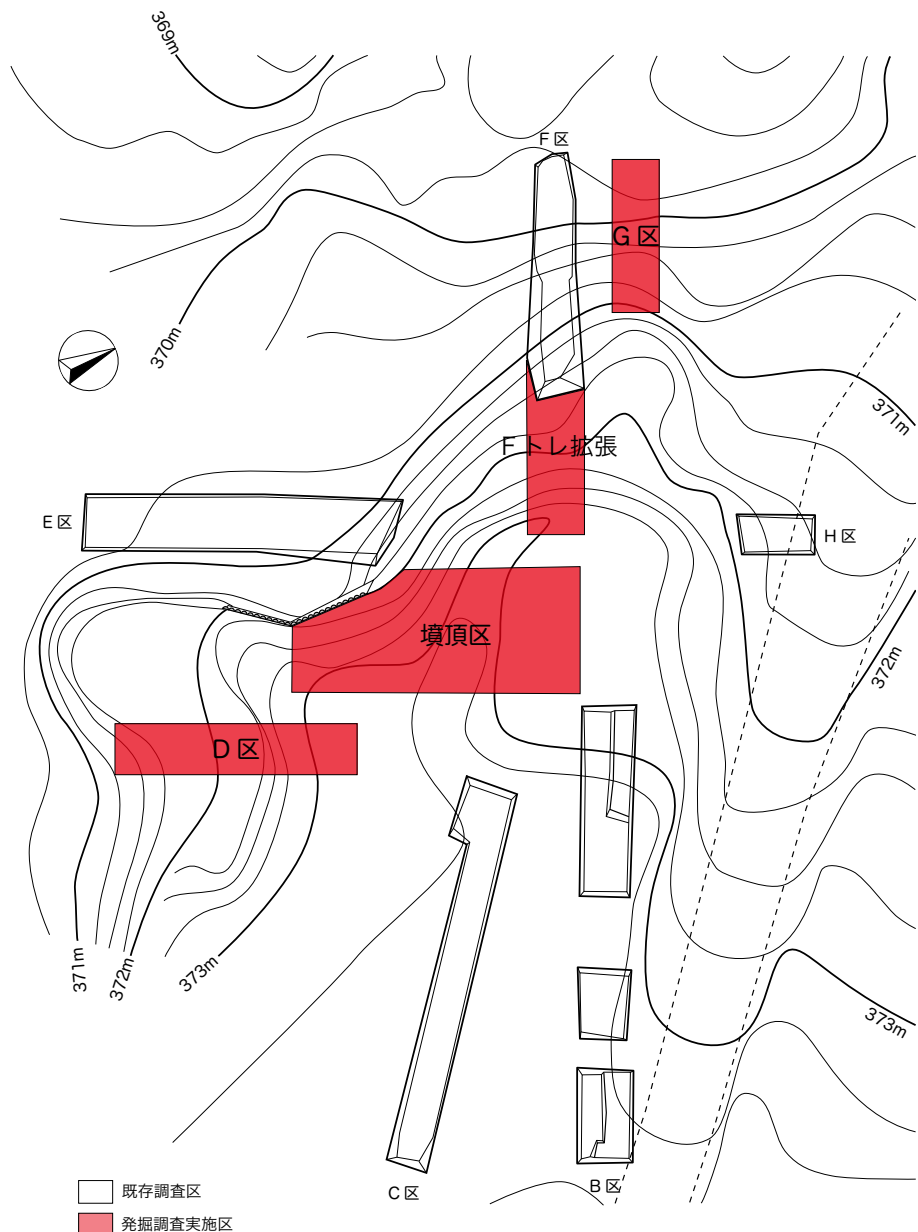


図2 241号墳発掘調査区 (S=1:200)

ましたが、

- ・長さ2.3m、幅1mと石室規模が大きいこと
- ・確認された石室の石材が厚いこと
- ・片側にのみ高く突出した石材がみられること（妻側立石）

・確認面では妻側立石の反対側の短側板がみえず、閉塞された状況とみられること
という構造上の特徴から、合掌形石室と考えられます。

これまで大室古墳群では25基余の合掌形石室が確認されていますが、古墳の盛土中から掘り出された合掌形石室は、長い大室古墳群の調査研究の歴史の中でも初めての事例となります。

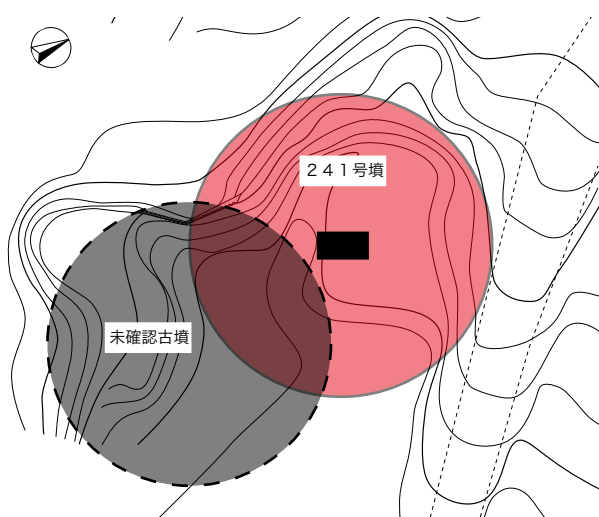


図4 241号墳・未確認古墳概念図



図3 合掌形石室各部名称

墳頂区の南側、合掌形石室の妻側立石の裏側からは、241号墳ではみられない大型石材がまとまって検出されました。これらの中には横穴式石室の壁に使用されたとみられる石材が含まれているうえ、241号墳とは直接関係のない六世紀後半以降の土器片が出土しています。このことから、241

号墳の南側墳丘上には、241号墳よりも新しい時期に、横穴式石室を埋葬施設とする別の古墳が重複して築造されていたと考えられます（図4参照）。



写真1

墳頂区発掘調査状況

Fトレンチ拡張区では、241号墳の墳丘石積みが確認されました。周辺に堆積する石材よりも一回り大きな石材が、緩やかな傾斜地に水平面を作り出すように配置されています。緩やかな傾斜地に241号墳を築造するための墳丘基底部にあたると考えられます。

また、最も外側の石は平坦面を外側に向けて配置されており、これが墳丘端部を示している可能性が考えられます。この石材を墳丘端部と仮定した場合、墳頂区の合掌形石室まで水平距離で約7mを計り、241号墳が14m程度古墳であったと考えることができるようになりました。



③241号墳からの出土品

出土品には、土師器（はじき）・須恵器（すえき）・写真2 Fトレンチ拡張区埴輪（はにわ）があります。

土師器は非常に少ないですが、墳頂区より高杯（たかつき）が出土しています。

須恵器は墳頂区より、複数個体の甕の破片が出土しています。

埴輪は墳頂区ならびに墳丘周囲から多量に出土しています。出土した埴輪の種類は円筒埴輪・朝顔形埴輪・人物埴輪があります。この他、器種不明の形象埴輪（けいしょうはにわ）の破片があり、人物埴輪の他にも器財をかたどった埴輪が樹立されていた可能性が高いと考えられます。

まとめ

今回の発掘調査で明らかとなった点は以下のとおりです。

- ①墳丘は積石塚で、埋葬施設は合掌形石室である。
- ②241号墳は14m程度の規模である可能性が高い。
- ③墳丘上には円筒埴輪と朝顔形埴輪が樹立され、人物埴輪等の形象埴輪も樹立されていた。
- ④合掌形石室の周囲には、土師器高杯や須恵器甕が設置されていた。
- ⑤古墳の諸要素ならびに出土品から、五世紀後半代の築造と考えられる。
- ⑥241号墳の南側には、241号墳よりも新しい時期に、横穴式石室を埋葬施設とする別の古墳が築造されていた。

大室古墳群における古墳の築造は、ムジナゴーク単位支群や大石単位支群など尾根上や谷において同時多発的に合掌形石室を埋葬施設とする積石塚古墳の築造に開始されると理解されていますが、集落にほど近い山裾部でも同様であることがわかりました。山裾部の古墳は比較的新しいことから、尾根上や谷部に最初造られた古墳群が徐々に範囲を拡大し、山裾部にまで古墳が造られるようになった、と一般的に考えられていただけに、241号墳の持つ意義は、大室古墳群を考えていく上で極めて重要な位置を占めています。

また、今回の調査で、241号墳の墳丘規模を推定する手がかりが得られましたが、古墳の形を決定することはできませんでした。241号墳が大室古墳群で一般的な円墳であるのか、あるいは古墳時代中期後半代に登場する方墳であるのか、この点を追求することは今後の大きな課題となっています。

合掌形石室の事例



ムジナゴーク単位支群 168号墳



大石単位支群 225号墳